

# 組み込み型金融の最前線

【新連載】第①回

## 組み込み型金融の 国内外のトレンド



デロイトトーマツグループ  
パートナー  
**赤星 弘樹**

### 時代の変遷に伴い トレンドが変化

事業者が自社サービスに金融機能を導入する「組み込み型金融」が広がっている。連載の初回では、国内外のトレンドを紹介したい。組み込み型金融の広がりには大きく三つの波がある。第一の波が2010〜20年ごろだ(図表)。銀行が独占していた金融機能がアンバンドリング(分離)され、決済、融資、保険などのサービスが個別のフィンテック事業者によって提供されるようになった。だが、利用者は信頼を寄せる金融機関を選択し続ける傾向が強かった。

21年から潮流が逆転し、現在は第二の波の中にある。非金融事業者が自社サービスに金融機能をリバンドリング(再統合)する動きが加速している。ECサイト運営会社や鉄道会社などが金融機能を自社サービス内に組み込むことで、ユーザーは一つのサービス内で金融体験を完結できるようになっている。同時に、25年からは第三の波も訪れている。「自律金融(Autonomous Finance)」だ。自ら考えて行動するAI(人工知能)である「エージェンティックAI(AIエージェントとも称する)」と、ステープルコインなどブロックチェーン(分散



型台帳)技術が台頭している。従来の金融インフラのコストや時間の限界を解決し、利用者が意識せず金融サービスを受容する時代の到来を予感させる。

### 主戦場は個人向けから BtoB領域に移行か

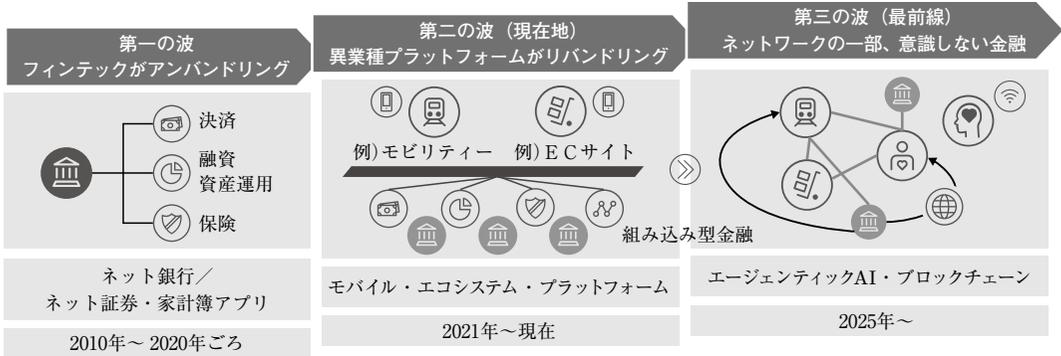
デロイトグローバルの調査によれば、組み込み型金融の収益規模は34年に742億<sup>ドル</sup>以上へと成長し、24年(201億<sup>ドル</sup>規模)の3倍以上に拡大する見込みだ。これまでは、決済や少額短期ローン、資産運用など個人顧客向けの機能提供が中心であったが、今後はBtoB領域、とりわけ中堅・中小事業者向けの

サービスにスポットライトが当たるだろう。企業の経理・財務に残るアナログな請求処理に対してシームレスな決済や会計ソフトの連携を一体で提供したり、ファクタリングなど金融サービスを提供したりすることが考えられる。

米国の事例を二つ紹介したい。まずは、レストラン向けにシステムを提供するToast(トースト)だ。トーストの金融関連収益は、本業であるソフトウェア利用料を上回る規模となっている。POSレジや注文管理などの業務機能に加え、店舗向け融資サービスも提供しているのが特徴だ。融資を裏側で実行している金融機関は、米ユタ州の産業銀行ウェブバンクである。融資サービスでは、AIがPOSシステムに蓄積された売上げデータをリアルタイムで解析し、店舗ごとに最適な融資可能額を即座に提示。書類提出は不要で、申し込みから資金調達までオンラインで完結できる。返済は売上げの一定割合を自動的に天引きする「売上げ連動型」の柔軟な仕組みで、季節変動や

〔図表〕

組み込み型金融の変遷



〔出所〕 筆者作成

売上げ減少時の店舗負担を抑えている。ECサイトのプラットフォームを提供するカナダ発の Shopify（ショッピファイ）もまた、実態は巨大な金融サービス企業である。同社の売上げの約7割以上を決済や金融関連サービスが占める。裏側で口座開設や資金移動などの機能を提供しているのは、米国のイボルブ・バンク・アンド・トラストとファイブ・サード・バンクだ。ストアの決済と取引を一元管理できる法人口座「Shopify Balance」の仕組みは独特だ。従来、銀行口座の開設が難しかった小規模事業者や起業家でも、ネット上ですぐに法人口座を開設できる。売上金も最短で翌営業日に入金されるため、事業者のキャッシュフロー改善に貢献している。さらに、USDCなどステーブルコインによる決済をいち早く導入し、従来は高額だった海外取引の手数料を大幅に低減している。

重要な変化をもたらす AIとブロックチェーン

前述のとおり、組み込み型金融には第三の波が訪れつつある。それは、これまで以上に企業や個人に金融機関を意識させることなく、シームレスに利便性の高い金融サービスを提供する仕組みである。かつてインターネット接続は特別な仕組みだったが、現在WiFiによって空気のような存在となったように、金融も同様の道を歩むと考えられる。例えば、企業の財務担当者が「来月の資金繰りを最適化して」と自社のAIエージェントに指示したとする。すると、AIが資金不足リスクを検知し、複数の金融サービスの融資条件を比較した上で、承認後は即座に最適な資金移動を行う。AIエージェントとの接続により、金融取引はよりスムーズなものとなるだろう。

さらに、ブロックチェーン技術の普及も重要な変化をもたらしている。ステーブルコインは国境を越えた決済手段として期待されており、すでに米国債などはトークン化され、デジタルアセットとしてブロックチェーン上で土日や夜間でも売買可能になっている。ブロックチェーン技術は組み込み型金融の利便性を格段に高めるポテンシャルを秘めているといえる。

一方で、AIエージェントやブロックチェーン技術を活用した金融サービスにおいて、「要求と異なる結果や対応漏れが発生した場合に誰が責任を取るのか」など、導入に際しての課題は複雑かつ多岐にわたる。新たな波が訪れても、金融機関などによるコンプライアンスの遵守や資産を預かる信頼を提供する役割は不可欠である。

次回以降、組み込み型金融における決済や口座、貸付、保険資産運用の動向を各回で掘り下げていきたい。

あかほし ひろき  
日系ITコンサルティング会社を経て現職。フィンテック・ブロックチェーン領域リーダー。金融新事業開発、フィンテック活用、デジタル戦略、業務・組織改革、ガバナンスなどのプロジェクトに従事。現在、組み込み型金融やウェブ3など成長領域に関するグローバル動向の分析や戦略立案を担当。